シンポジウム

幼児保育と準備教育（要旨）

——司会・山下俊郎——

一、幼児教育のカリキュラムの面から　日本女子大学　村山貞雄
二、幼稚園の立場から　音羽幼稚園　柿内三郎
三、小学校の立場から　成蹊小学校　滑川道夫
四、児童学の立場から　愛育研究所　平井信義
五、幼年教育の立場から　お茶の水女子大学　周郷博

一、幼児教育のカリキュラムの面から

村山貞雄

就学のための準備教育が今日次第にさかんになりつゝありますが、只今山下先生が言われましたように、これについて、可否を考え可であるとすれば、今後どのようにやつてゆくのがよいか、否であるとすれば、どのよう

にしてとりやめるべきか、ということを、このシンポジュームで話し合うことになると思います。

そこで私は、このシンポジュームの前座として、幼稚園の準備教育というものが、どのようなものであるか、その地位と意味を大づかみに把握して、シンポジュームが展開するための役割を果して、柿内先生におゆずりしたく思います。

現在おこなわれている準備教育がよいか悪いかというようなことは、ちよつと考えても悪いことがわかつているようで、しかも実際には相当な勢でさかんになりつゝあります。愛育研究所に来る教養相談も九月頃からはじまつて、一月二十日頃までは非常に多く、準備教育のための教育相談は受けつけないとわざ〳〵禁止しているにも拘らず、神経質とか何とかに理屈をつけてやつて来、教養相談の大部分は、国立、私立、私立では慶応、青山学習院、成城、双葉女子大等の学校の準備教育に関するものであり、しかもその勢は毎年非常に盛んになりつゝあります。このように東京はもとよりのことですが、私はこの一週間あまり、関西に行つておりましたが、やはりあちらでもかなり盛んです。これには、それだけの理由があるはずですから、単に教育上悪いと言うだけでは、この問題は解決しません。しかし、教育上非常に悪いのか少し悪いのかということが考えられますと、このことは決論にもかなりの影響を与えるはずですし、又どういう点が悪いのかが分りますと、今度はそういう点を除いて行うことができます。

そこで、私は教育学の立場から――題目にはカリキュラムの立場からとなつていますが――まあこのような面を含んだ教育学の立場から、お話してみたいと思います。

学校教育について広く考えますと、下級学校は――下級学校というのは、より小さい者の学校という意味ですが、――下級学校は、それ自身で完結を主とする者と上級学校の予備校的役割を果すものに分けられます。大体庶民を入れる学校は完結学校が多く、上流階級を入れる学校は予備校として発達したものが多くありました。たとえば、大学の予科や旧制の高等学校は、予備校の性質を完全に又は相当に持つており、一方、小学校は完結教育でありました。さらに、これを、具体的にみますと、予備校とは、たとえば大学のように上の学校があり、その学校で基礎教育の必要なことから次第に下の方にのびて来たものであり、完結教育は、これと反対に、寺小屋のような低い庶民学校がはじめにあつたのが、庶民の程度が次第に高まつて来たことから、少しづつ上にのびて来たものであります。たとえば、現在の中等学校は、この両者の合わさつて出来たものであり、その二重の性格を持つております。現在、わが国の学校制度は完結教育主義をとつておるのでありますが、歴史的にみられる自然の要求は制度によつて変わるものではなく、高等学校をはじめ、学校カリキュラムに上級学校のカリキュラムが非常な影響を与えておるのであります。

そこで幼稚園は、どのような性質を持つているかというと、これは庶民に余裕ができ、幼児期にまで教育ということを考えたという点もありますが、同時に金持が小学校に上るまでに、すでにその準備教育としての基礎教養の必要と可能を考えて生じた特殊教育として成長して来たとみることができ、準備教育的な面を多分に持つております。

実際幼児保育の中でも、幼稚園教育は、家庭と学校をつなぐ、すなわち家庭から学校へスムースに進ませるための、緩衝地帯のようなことが大きな目的になつておりまして、小学校に入るための準備教育が行われるのは正しいことであり、私は、幼稚園の先生がもつと小学校というものを考えて、保育をする必要があるのではないかとさえ思います。したがつて、後程どなたかがお話になるかと思いますが、準備教育の大動力となつている、幼稚園にたいする父兄の予備校的な考えは一応正しいと認めざるを得ません。

そこで、更にこの準備教育の内容を考えてみますと、小学校教育のための準備教育と、それから小学校入学のための準備教育に分けて考えることが必要であります。このうち我が国では、入学難の学校が多いという事情から、後者の方が多くなつており、高等学校などでも、そのカリキュラムは、大学教育の準備というよりも、大学の入学試験に、きわめて左右されている実情です。これはしば〳〵非難されますが、しかし無理のないことでありましてたとえば、結婚難の折は、良妻教育と言いましても、まず結婚のためのいろいろの工夫がおこなわれるようなものであります。したがつて、小学校の就学試験の準備教育がさかんになり、幼稚園のカリキュラムの中に、就学試験の内容が含まれてくることは、自然の勢いとして当然であります。ゆえに、このようなカリキュラムを、悪いという前に、あるいは悪いと言いえても、それを取り去るように実行するのには入学難そのもの又は入学難に附ずいするものを取り去らねば効果が、非常に少いのであります。

入学難を解消する方法は、第一に、これらの入学難の学校を解消すること、たとえば国立や私立の小学校が抽せん等で、実質上入学難をなくすることが考えられます。このような政策的な入学難の解決法を私は最も望ましく思いますが、さもなければ、第二に入学難の技術的な解消法として、上級学校である小学校の就学許可人数の総数が就学希望者の総数より少くないことを利用して、幼稚園と父兄の方で適当にやさしい学校に導くのが、次善の策であると主張いたします。

そこで更に考えを進めますと、このようにして入学難が実際に避けられる場合はよろしいが、避けられない場合は、どうすればよいかということが問題になります。この問題においてまず準備内容、次いで準備方法に分けて考えてみましよう。

小学校の入学試験の内容はどこでもいわゆる素質検査を行つております。簡単に言えば、いわゆるアチーブメント・テストではなく、インテリゼンス・テストであると言えます。したがつて幼稚園で音楽・会話・手技のほかに、保育後又は保育中に知能検査を練習するようになり、これがこのシンポジュームでとりあげられたものであります。

これは、小学校当局は、素質のよい者を入学させて爾後の教育に効果をあげようとする意味とともに、幼児保育中に学習できぬものを試験内容にしようと考えて、いわゆるメンタルテスト的なものを小学校で就学試験に行おうとしたものでありますから、この考え方には、私は賛成であります。ところが、幼児教育をする先生や父兄の方で、このメンタルテストを、いろ〳〵な種類やつておくと、同一又は似たメンタルテストが出た場合に、知能点があがることや、実際の就学テストには、よいメンタルテストを作るつもりでも、故意か無能かに原因して学力結果がかなりあ

らわれる、不純なインテリゼンス・テストが多いことに着目して、そのような内容の知育たとえば簡単な計算などを、カリキュラムに入れる傾向が出て来たのであります。

素質検査である知能検査を学習するというようなことは、上級学校である小学校の方からみますと、親の心を予知らずと言いたくなるものであつて、全く非教育的なものであり、正しくありません。しかしこれらの弊害も、音楽や図画などの現在のカリキュラムの一部、又は全部が就学試験として行われる場合よりはるかによいものであると考えます。

そこで、一層素質検査に徹底したテストを課すのが理想的であります。そのようなよい検査が出来ない場合でも、いろ〳〵な保育内容を課すより、就学試験をする場合、小学校の方で知能検査をおこなうのは、よい方法であると考えて賛成であります。

以上準備教育をやらねばならぬ場合に、その内容として、テストはよい内容であることを述べたのでありますが、更にこの内容のものをいかにやるかという方法について考えてみましよう。

すなわちそれでは、就学試験のテストを保育カリキュラムにどのように入れるのがよいかということであります。

保育カリキュラムに、テスト的な内容を入れることについて、只今調査中ですが、その教育効果の研究は、まだあきらかな結果が出ておりません。ただ過度に入れた場合に弊害があらわれていますが、生活カリキュラムのなかで、絶えず自ら考えてゆくことや、クイズ的な教育法をとり入れた場合、別に弊害があらわれておりません。しかし、テスト的な内容をカリキュラムに入れて、それで保育の効果をはかろうとしても、その効果は少ないようであります。それで結局その時間を、ほかの保育内容から、うばうことになりますから、消極的に保育効果をさげることになります。

更に、この準備教育は保育中に行う方法のほかに、保育後必要な幼児のみを集めて課外として行う方法があります。或る幼稚園は保育終了後週四日二時間位行つている所もあります。保育後に、一種のエキストラ・カリキュラムとして行う場合は、保育内容を少くする心配がありませんが、強度に行うと身体面からみて好ましくなく、又幼児期の遊びの時間を多少うばうことになりますが、少しずつ行うのでしたら、あまり弊害はあらわれておりません。

しかしこのエキストラカリキュラムに参加しない幼児との間に心理的なまさつが生じる弊害がありますから、この点に気をつけないと、幼児保育に弊害を生じています。昨年は教育相談にやつて来た親のなかで次のようなことを訴えた者がありました。すなわち「先生はこの子は知能が低いから、よい学校に入れる可能性がないし、他の幼児の邪魔になるから、準備的なカリキュラムの一員に入れないと言われるが、本人は公立の小学校に入るつもりではあるが、残つて皆と一緒にやりたいと言つてきかないが、どうしたらよいだろうか」という相談が三人ありました。このように、心理的な面に注意する必要が生じて来ます。

しかもテスト的内容の学習意欲をあげようとして「頑張ればいい小学校に入れるから」とか、「なまければお友達が附属に入つてもお前は入れないんだ」などと言つて興味をおこさせようとしがちですが、このような刺戟は、非常に悪い結果をまねきます。特に入学

しそこなつた場合に悪い影響を与えております。神経質の主訴で教育相談にやつて来る幼児のなかには、家に帰つて親が積み木などをもつて来ただけでも顔色を変えて逃げ出す状態になつているものもありました。この最もひどい例は、現在神奈川県の人で、専門学校を出た親でしたが、何等反省の色がなく、私の方で指導しても、ただ〳〵いい学校にどうかして入れてしまいたいという気持で満ちていました。

以上、私の言つたことをまとめますと、幼稚園で小学校のための準備教育を行うのはよいが、小学校教育のためではなく小学校入学のための準備教育は、教育効果が極めて少いから政策的に入学難を解消するのが理想的である。しかし、小学校の方でそれをきかずそれができない場合は、技術的に、先生や有識者が父兄を指導することによつて、準備教育をしてまで入学難の学校に入れようとしないことが望ましい。もしこれらのことが、父兄の方でそれをきかず、それができない場合は、できるだけ弊害があらわれないように、行うこと、すなわち、過度に行わなければ、あまり弊害があらわれない。そして、その内容としてはテストは適当であり、そのやり方は保育中に行う方がすじが通つているのでありますが、もし保育後にやる場合は、他の幼児との間の心理的なまさつに注意し、且つ、学習意欲をたかめようとして小学校の良否を言つたりしないことを述べたのであります。

以上によつて、小学校の準備教育が持つ地位と次に展開するための大ざつぱな概念を述べて、前座の役割を果したく思います。

二、幼稚園の立場から

柿内三郎

私の此のシンポジウムで話をしろと御依頼を受けて何が此のシンポジウムの目的か解らぬ儘に出席したのですが、今山下先生や村山先生の御話を拝聴して全く御同感で準備教育本然の姿が明示された以上何も附け加える必要もないと思います。併し此処に立ちました機会に準備教育に対する私の考を少し申述べさして頂きます。

世の中に立つて独立独歩で進んで行く為には社会に対する一定の識見を持ち且つ何かの職業的能力を具える必要があります。此の職業教育を受ける前に持たなければならない知識を具える為に必要なのが準備教育であります。

人間が嬰児から幼児へ、幼児から少年へと段々発達して行く間に、初めは見たり聞いたりする丈なのが、注意して見たり聞いたりするようになり、其の中に記憶の力が増すにつれ、較べたり判断することが出来るようになつて来る。視聴の力や、記憶の力や、判断の力は夫々時期によつて厚薄があり、従つて知識の涵養には時期に伴つて之に順応した準備教育が施されなければならない。

勿論精神の発達は大脳組織の発育と、之を助長するに必要な環境の有無によつて異なるから凡ての同年令の人は同じ様な発達を遂げているとは言えないのであるが、一般には、三、四才の時には、三、四才に相当した準備